

ルカの誕生物語

——ルカ1:5～2:52の伝承と編集——

嶺 重 淑

序

ルカはマタイと同様、イエスの誕生物語（ルカ1:5-2:52）¹から福音書を書き始めているが、マタイとは異なり、イエスの誕生を洗礼者ヨハネの誕生と関連付けつつ、両者の誕生の記述を並列させる形でこの物語を記している。確かに、他の福音書においても、ヨハネはイエスのために道備えをする先駆者として捉えられているが（マタ1:1以下、マコ1:2以下、ヨハ1:19以下参照）、公的活動以前のヨハネについては一切触れられておらず、その意味でもルカ福音書の記述は独特といえる。

本稿では、ルカ1:5-2:52の各段落の構造、資料および編集を厳密に検討していくことにより、ルカの誕生物語の伝承から編集に至るプロセスを見極めていきたい。

1. ルカ1:5-2:52の概要

1.1. 全体構成

まずルカ1:5-2:52の全体構成について確認しておきたい。この箇所全体は内容的に以下のように区分できる。

1 ルカ1:5-2:52の一連の物語は、末尾に少年時代のイエスのエピソードを含んでいるという意味では、「イエスの誕生・幼少期物語」とすべきところであるが、この物語の中心的主題はあくまでもイエスの誕生であることから、本稿ではこの箇所全体を「イエスの誕生物語」と見なすことにする。

- I. ヨハネの誕生告知 (1:5-25)
- II. イエスの誕生告知 (1:26-38)
- III. マリアとエリサベトの出会い (1:39-56) {マリアの賛歌 (1:46-55)}
- IV. ヨハネの誕生 (1:57-80) {ザカリアの賛歌 (1:67-79)}
- V. イエスの誕生 (2:1-21)
- VI. 神殿奉獻 (2:22-40)
- VII. 神殿における少年イエス (2:41-52)

このように、ルカの誕生物語においては、洗礼者ヨハネとイエスの誕生の出来事が交互に織り合わされるように描かれており、その意味でこの箇所全体は統一性を持っている²。事実、この物語は両者の誕生告知 (I、II) と誕生の記述 (IV、V) を軸に構成されており、また、その誕生告知と誕生の記述の間に挟まれた、両者の母親の出会いについて語るエピソード (III) は、双方の誕生告知と誕生の記述を結びつけるとともにヨハネとイエスの関係性を強化する機能を果たしている。さらに、両者の誕生告知と誕生の記述の間には、右の表に示すように、個々の点に至るまで顕著な並行関係が確認できる³。

とはいえ、この表からも明らかなように、両者の並行関係は必ずしも厳密なものではない。例えば、イエスの誕生の場面 (V) はヨハネのそれ (IV) よりもはるかに詳細に記されている点や、2:22以下の箇所 (VI, VII) については対応する部分がほとんど見られない点からも明らかなように、特に後半部分の対応関係は明瞭ではない。もっともこの点は、両者が対比されつつも、最終的にはイエスの優位性が示すことにこの物語の本来の意図があるという理由によって説明できるであろう。

2 ルカの誕生物語は神殿における場面で始まり、神殿における場面で結ばれている。さらにルカ福音書そのものも神殿での場面で結ばれており (ルカ24:53)、そのようにルカ福音書全体は神殿での場面によって枠付けられている。

3 ルカ1-2章における並行群については、さらにC. H. タルバート著・加山宏路訳『ルカ文学の構造-定型・主題・文学類型』、日本基督教団出版局、1980年、96-99頁を参照。もっともタルバートの対応表の中には強引にこじつけられた部分も多く含まれている。

【ルカ1-2章における並行群】

<p>I. ヨハネの誕生告知 (1:5-25)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両親の紹介 (5-7) ・天使の出現 (8-11) ・ザカリアの不安 (12) ・「恐れるな」との天使の言葉、男児誕生の告知と命名の指示 (13) ・生まれる子の使命 (14-17) ・ザカリアの反論とその理由 (18) 「何によってそれを知ることができるか」 ・天使の答え (19-20) ・エリサベトの反応 (24-25) 	<p>II. イエスの誕生告知 (1:26-38)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・両親の紹介 (26-27) ・天使の出現 (28) ・マリアの不安 (29) ・「恐れるな」との天使の言葉、男児誕生の告知と命名の指示 (30-31) ・生まれる子の使命 (32-33) ・マリアの反論とその理由 (34) 「どうしてそのようなことがあるでしょう」 ・天使の返答 (35-37) ・マリアの反応 (38)
<p>III. マリアとエリサベトの出会い (1:39-56)</p>	
<p>IV. ヨハネの誕生 (1:57-80)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヨハネ誕生 (57) ・親族の喜び (58) ・出来事への反応、出来事の伝播、聞いた人々が心に留める (65-66) ・幼子は八日目に割礼を受け、天使が命じたように命名 (59-64) ・幼子の役割に関する予言的賛歌 (67-79) {=ザカリアの賛歌 (1:67-79)} ・幼子の成長 (80) 	<p>V. イエスの誕生 (2:1-21)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イエスの誕生 (6-7) ・羊飼いたちの喜び、賛美 (20) ・出来事への反応、出来事の伝播、マリアが心に納める (17-19) ・幼子は八日目に割礼を受け、天使が命じたように命名 (21) <p>VI. 神殿奉獻 (2:22-40)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼子の役割に関する予言的賛歌 (29-32) ・幼子の成長 (40, cf. 52) <hr/> <p>VII. 神殿における少年イエス (2:41-52)</p>

1.2. 資料と編集

この物語の起源は明らかではない。マタイの誕生物語とは内容的に明らかに異なっており、両者間に依存関係を認めることはできない⁴。そこで、このルカの誕生物語の起源について、研究者の見解は以下の3つの立場に大きく分類される。第一の立場は、この物語の背後に単一の資料を想定しようとするものであるが、現代ではこの見解をとる研究者は稀である⁵。第二の立場は、この物語を旧約章句に範をとったルカの書き下ろしと見なすものであるが、この箇所とルカ文書の他の箇所との間には思想的・神学的観点の相違が見られ、この箇所には非ルカ的な表現が多く用いられていることから、この見解も受け入れがたい。結局、最も蓋然性が高いのは、口伝、成文にかかわらず、この物語の背後に複数の資料の存在を想定する第三の立場であり、多くの研究者はこの見解をとっている⁶。

誕生物語に用いられている個々の資料の範囲を厳密に確定することは難しいが、各段落の核となる部分は総じて伝承に遡ると想定できる。もっとも、ルカ2章の内容は1章の内容を必ずしも前提していないことから伺えるように、ルカ1～2章の資料的背景は複雑である。そこで以下、個々の段落について検討していくことにより、この誕生物語のどのような伝承・編集のプロセスを経て、現在の形になっていったのかを見極めていきたい。

4 マタイの誕生物語がセム語的特質を強くもっているのに対し、ルカの誕生物語はギリシア語70人訳聖書の影響を強く受けており、背景にギリシア語のユダヤ教伝承が想定される。なお、両者の誕生物語が一致して伝えているのは、ヘロデの時代のベツレヘムにおいて、ダビデの子孫であるヨセフと婚約していた処女マリアが、天使の予告通りに聖霊によってみごもり、イエスと呼ばれる男児を生んだという点である。

5 例えば、K. H. レングストルフ著・泉治典、渋谷浩訳『ルカによる福音書』(NTD新約聖書註解(3))、1976年、105頁。

6 例えば、R. プルトマン著・加山宏路訳『共観福音書伝承史Ⅱ』(プルトマン著作集2)、新教出版社、1987年、157-170頁やI. H. Marshall, *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text* (NIGTC), Exeter 1978, pp. 47-49等。

2. ヨハネの誕生告知（ルカ1:5-25）

2.1. 構成

この箇所は内容的に以下のように区分できる。

1. 導入:登場人物の紹介（5-7節）
2. 天使の出現とザカリアの恐れ（8-12節）
3. 天使によるヨハネ誕生告知（13-17節）
4. ザカリアの反応と天使の答え（18-20節）
5. ザカリアの神殿退出と帰宅（21-23節）
6. 結び:エリサベトの懐妊（24-25節）

2.2. 資料と編集

キリスト教的特質が特に強調されておらず、ユダヤ教社会の慣習に関する知識を前提とするとともに旧約聖書の定型句を多く含むこの箇所は、全体としてパレスチナ起源であると考えられる⁷。おそらく元来は後続の1:57-80のヨハネの誕生の記事と直接結びついており、古い伝承に遡ると考えられるが、R. ブルトマンはじめ多くの研究者はパレスチナの洗礼者教団に遡ると推定している⁸。一方、R. E. ブラウンは、この箇所の多くの部分がダニエル書やマラキ書等の旧約聖書の記述と並行していることから、この箇所の背後に特定の資料が存在することを疑問視し、ルカによる編集的構成の可能性を指摘しているが⁹、ルカ1章と2章との間には明らかなずれが認められることからそれは考え難い。もっ

7 旧約聖書における天使の告知の記述には一定のパターンが存在し、天使の出現、天使と直面した人の恐れ、天からの使信、拒絶やしるしの求め、しるしの提供もしくは保証、という5つの要素から構成されている。事実、イシュマエル（創16:7-13）、イサク（創17:1-21; 18:1-15）、サムソン（士13:3-20）の誕生告知はこのパターンに従っている。

8 ブルトマン、前掲書、158-159頁。

9 R. E. Brown, *The Birth of the Messiah: A Commentary on the Infancy Narratives in the Gospels of Matthew and Luke*, New York 21993, pp. 264-285.

とも、冒頭の5-7節¹⁰および次の段落に接合する末尾の24-25節¹¹に関しては、編集的に構成された可能性が高い。ルカは洗礼者ヨハネに関する伝承をもとに、それを自らの視点から部分的に編集していくことによりこの箇所全体を構成したのであろう。

3. イエスの誕生告知（ルカ1:26-38）

3.1. 構成

この箇所は内容的に以下のように区分できる。

1. 導入:天使ガブリエルのマリア訪問（26-27節）
2. 天使の挨拶とマリアの戸惑い（28-29節）
3. 天使によるイエス誕生告知（30-33節）
4. マリアの反応と天使の答え（34-37節）
5. 結び:マリアの従順と天使の退去（38節）

3.2. 資料と編集

このイエスの誕生告知の物語は、旧約的な特徴が多く認められる点など、先行するヨハネの誕生予告の物語に多くの点で対応しており、内容的にも深く結びついている。もっとも、この物語そのものは元来ヨハネの誕生告知の物語とは無関係で、独立した伝承であったと考えられ¹²、多くの研究者は、ヘレニストのユダヤ人キリスト教の集団において成立したものと想定している。一方、この段落のうち、ヨハネの誕生告知との接合点を作り上げている26-27節及び36-37節は全体としてルカの編集句であろう。さらに、必ずしも文脈に調和して

10 5-7節にはルカの表現を多く含まれており、さらに旧約章句との関連が強い（ルカ1:5とサム1:1、ルカ1:7と創18:11を比較参照）。

11 エリサベトが「5ヶ月身を隠していた」（1:24）という記述は、後続の段落冒頭の「それから6ヶ月目に」（1:26）に明らかに関連づけられている。

12 すなわち、双方の物語の間に依存関係ではなく、両者とも全体的な枠組みにおいて、旧約の類似した物語に準じて典型的であるに過ぎない。

いない34-35節¹³も二次的付加（ルカの編集句）と見なし、38節は元来33節に直結していたという見解も見られるが¹⁴、この点は明らかではない¹⁵。いずれにせよルカは、イエスの誕生告知に関する伝承をヨハネの誕生告知と適合させつつ、この箇所全体を編集的に構成したのであろう。

4. マリアとエリサベトの出会い（ルカ1:39-56）

4.1. 構成

マリアとエリサベトの出会いについて記すこの箇所は39節の「行った」（πορεύομαι）と56節の「帰った」（ὑποστρέφω）という対照的な二つの動詞によって枠付けられている。この段落全体は、末尾の56節を除くと、マリアのエリサベト訪問とマリアに対するエリサベトの祝福について述べられた部分（1:39-45）と、それへの応答としてマリアの口から語られた「マリアの賛歌」（1:46-55）の二つの部分から構成されている。後半のマリアの賛歌は統一的に構成されており、マリア自身のことについて述べる第一連（46-50節）とイスラエルに対する神の救いの業について述べる第二連（51-55節）に区分できる。両者は幾つかの重要な表現を共有し¹⁶、いずれも神の憐れみのモチーフで結ばれている（50節及

13 30-33節の天使による受胎告知に対して、処女性の観点からこれに当惑する34節のマリアの言葉はうまく対応しておらず、また、ヘレニズムの色彩をもつ35節の記述は、ダビデ王朝を継ぐ者によるイスラエルの統治について述べる32-33節と調和していない。

14 例えば、ブルトマン、前掲書、159-160頁。またH. Klein, *Das Lukasevangelium* (KEK), Göttingen 2006, p. 95は、33-34節に加えて28-29節も二次的に付加されたものと見なしている。

15 この点に関してF. Bovon, *Das Evangelium nach Lukas I* (EKK III /1), Zürich/Neukirchen-Vluyn 1989, pp. 65,71-72は、並行する旧約の誕生告知物語に照らしても、34-35節の処女懐胎のモチーフなしに誕生告知物語は考えられず、両節が後から付加された痕跡は見られないと主張している。またG. Lüdemann, *Jungfrauengeburt. Die wirkliche Geschichte von Maria und ihrem Sohn Jesus*, Stuttgart 1997, p. 101は、そもそも後続のイエス誕生の記事には処女懐胎のモチーフは全く含まれていないことから34-35節がルカの編集句とは考え難いとしている。さらにJ. A. Fitzmyer, *The Gospel according to Luke I* (AB 28), New York 21983, pp. 336-337は、36-37節も含めてこの誕生告知全体（28-37節）はルカ以前に結合していたと見なしている（Marshall, op. cit., p. 63も同様）。

16 ἐποίησεν (49節/51節)、τὴν ταπείνωσιν (48節) と ταπεινούς (52節)、ὁ δυνατός (49節)

び54-55節)¹⁷。この箇所全体は以下のような構成になっている。

1. マリアのエリサベト訪問 (39-41節 a)
2. エリサベトの祝福 (41節 b-45節)
3. マリアの賛歌 (46-55節)
 - 3.1. 導入句 (46節 a)
 - 3.2. 第一連: マリアへの恵み (46節 b-50節)
 - 3.3. 第二連: イスラエルの救い (51-55節)
4. 結び: マリアの帰宅 (56節)

4.2. 資料と編集

この箇所全体は、明らかに先行する二つの誕生告知の物語を前提としており、マリアへの受胎告知とヨハネの物語が結合した後にこの位置に挿入されたものと考えられる。

最初のマリアのエリサベト訪問について述べられた部分 (39-45節) は、非ルカ的な文体・用語が多く認められ¹⁸、また、パレスチナの背景をもっていることから、ルカの創作ではなく、全体として伝承に遡るのであろう¹⁹。その意味では、この部分はルカ以前にルカ 1 章のイエスとヨハネの物語に結合していたと考えられる²⁰。一方、直前の段落との接合点を構成する冒頭の39節はルカの編集句であろう²¹。

と δυνάστας (52節)、τὸ ἔλεος (50節) と ἐλέους (54節) をそれぞれ比較参照。

17 マリア賛歌の文学的統一性については、R. C. Tannehill, *The Magnificat as Poem*, *JBL* 93 (1974) 263-275を参照。

18 例えば、εἰςを伴う場所の指示はルカ文書には僅少で (ルカ2:4,39のみ)、ルカはマコ5:1,11に出てくるこの表現を修正している。さらに、ἵνα構文による不定詞の代用もルカ的ではない。

19 I. H. Schürmann, *Das Lukasevangelium I* (HthK III /1), Freiburg/Basel/Wien 41990, p. 69やMarshall, op. cit., p. 77と同意見。Brown, op. cit., pp. 339-340に反対。

20 ブルトマン、前掲書、161頁やMarshall, op. cit., p. 77も同意見。

21 分詞形 ἀναστᾶσαは特にルカ的であり、新約用例44回中36回がルカ文書に見られる。ἐν ταῖς ἡμέραις ταύταιςは新約にはルカ文書にのみ見られる (ルカ1:39; 6:12; 23:7; 24:18; 使1:15; 6:1; 11:27)。動詞 πορεύεσθαιは、新約用例145回中ルカ文書に88回 (ルカ51/使37) 用いられている。

これに続くマリアの賛歌（46-55節）も、前後の文脈との間にズレが確認できることから、全体としてルカに由来するのではなく²²、ルカ以前の資料に遡るものと考えられる²³。おそらくルカが、この資料を現在の文脈に配置したのであろう²⁴。また、この箇所全体を締めくくる56節はルカの編集句と考えられる²⁵。

ルカは、マリアのエリサベト訪問の伝承（1:40-45）に別の資料から得たマリアの賛歌（1:46-55）を加え、さらに導入部（39節）と結び（56節）を加えることによってこの箇所全体を編集的に構成したのであろう。

22 一部の研究者（例えば A. von Harnack, *Das Magnificat der Elisabet* (Luk. 1,46-55) nebst einigen Bemerkungen zu Luk. 1 und 2, in: ders., *Studien zur Geschichte des Neuen Testaments und der Alten Kirche I* (AKG 19), Berlin/Leipzig 1931, pp. 75, 84-85) は、マリアの賛歌をルカによる創作と見なしているが、この賛歌は前後の文脈にそぐわないだけでなく、ルカ的な表現もほとんど含んでいない。もっとも、ルカ的表現を多く含む48節に関しては、ルカの編集句である可能性が高い（*ἰδοὺ γάρ* は2コリ7:11以外には新約中ルカ文書にのみ見られ[ルカ6/使1]、同様に *ἀπὸ τοῦ νῦν* も2コリ5:16を除くと新約にはルカ文書にのみ見られる[ルカ6/使1]）。

23 この賛歌がユダヤ的背景をもっており、ユダヤ教もしくはユダヤ人キリスト教の環境において成立したことは、「ハンナの歌」（1サム2:1-10）等の旧約章句やクムラン文書他のユダヤ教文書と並行する記述からも明らかであり、多くの研究者はこの賛歌が元来セム語（ヘブライ語もしくはアラム語）で構成されていたと考えている。これに対して Fitzmyer, op. cit., p. 358は、この賛歌が元来セム語で記されていた証拠はどこにも認められないと反論している。事実、70人訳聖書のハンナの歌とのより密接な関係に注目すれば、ヘレニズム・キリスト教の環境の中で生まれたという可能性も否定できないであろう。Bovon, op. cit., pp. 82-83は、この賛歌が旧約章句のみならず、「ソロモンの詩編」（ギリシア語）と関連している点を指摘している。

24 賛歌の前半部の中には先行する箇所を暗示する部分が多く認められる（例えば、*ἡγαλλίασεν*（47節）と *ἀγαλλιᾷσει*（44節）、*μακαριοῦσιν*（48節）と *μακαρία*（45節）、*τῆς δούλης αὐτοῦ*（48節）と *ἡ δούλη κυρίου*（38節）を比較参照）。もっとも、このことはこの賛歌が現在の文脈を前提としていたということを意味しているのではなく、むしろこれらの暗示はルカに遡るのであろう。

25 前置詞 *ὅν* は新約用例計127回中75回がルカ文書に見られる。動詞 *ὑπεστερέφω* は新約用例計35回中32回がルカ文書に用いられている（ルカ21/使11）一方で他の福音書には全く見られない。

5. ヨハネの誕生（ルカ1:57-80）

5.1. 構成

この箇所は、洗礼者ヨハネの誕生およびその後のヨハネの割礼、命名に関する記述（57-66節）と、そのヨハネ誕生を受けて父ザカリアが神に捧げる「ザカリアの賛歌」（67-79節）および結び（80節）から構成されている。

ザカリアの賛歌は、神によるイスラエルの救いについて述べる前半部（69-75節）とヨハネの将来の使命（1:14-17参照）を改めて確認する後半部（76-79節）に区分されるが²⁶、この賛歌全体は「訪れる」（ἐπισκέπτομαι）という語（68,78節）によって枠付けられており、またἔλεος「憐れみ」（72,78節）という語が前半部と後半部を結合している。

内容的にこの箇所全体は以下のような構成になっている。

1. ヨハネの誕生と命名（57-66節）
 - 1.1. ヨハネの誕生（57-58節）
 - 1.2. 幼子の命名（59-64節）
 - 1.3. 人々の反応（65-66節）
2. ザカリアの賛歌（67-79節）
 - 2.1. 導入（67節）
 - 2.2. 第一連: イスラエルの救いに対する神への賛美（68-75節）
 - 2.3. 第二連: 幼子の将来の働き（76-79節）
3. 結び: 幼子の成長（80節）

5.2. 資料と編集

この箇所も先行するヨハネの誕生予告の箇所（1:5-25）と同様、元来はイエスの誕生物語には属していなかったと考えられる。前半の57-66節については、1:26-56を前提としていないことから、元来は先行する誕生告知物語（1:5-1:25）

²⁶ 注目すべきことに、前半部全体（68-75節）は一文で構成されており、また、前半部が不定過去形で構成されているのに対し、後半部には未来形が用いられている。

に直結していたと考えられ、多くの研究者は、誕生告知物語と同様、洗礼者教団の伝承に遡ると考えている。一方で、要約的報告としての特徴をもつ末尾の66節cはルカの編集句であろう²⁷。

形式および内容においてマリアの賛歌（46-55節）に類似するザカリアの賛歌（68-79節）は全体として伝承に遡り²⁸、元来はこの文脈に属しておらず、ルカによってこの箇所に加えられたのであろう²⁹。冒頭の67節はルカの編集句と考えられる³⁰。また、この賛歌の前半部（68-75節）と後半部（76-79節）は、文体においても内容においても明らかに異なっていることから、両者は元来結びついておらず、後半部（とりわけキリスト教的要素をもつ76-77節）は異なる資料に遡り、ルカによって（もしくはルカ以前に）付加された可能性が高い（1:32参照）。なお、救いの成就について述べる70節はルカの編集句であろう³¹。最後の80節はヨハネの物語において不可欠の要素ではなく、むしろヨハネの宣教について述べる3章を導入する機能を果たしており、さらに2:40や2:52のイエスの成長の記事と並行していることから、ルカの編集句と考えられる³²。いずれにしても、ルカは洗礼者ヨハネの誕生に関わる資料（57-66節ab）とザカリアの賛歌の資料等（68-69, 71-75, 76-79節）を用いつつ、この箇所全体を編集的に構成したのであろう。

27 この箇所（καὶ γὰρ χεῖρ κυρίου ἦν μετ' αὐτοῦ.）と使11:21（καὶ ἦν χεῖρ κυρίου μετ' αὐτῶν, …）を比較参照。一方、Klein, op. cit., p. 122は、ルカ的な表現を多く含む64-66節全体をルカが構成した可能性を指摘している。

28 ザカリアの賛歌はマリアの賛歌と同様、ユダヤ的・終末論的色彩を強く持っており、ユダヤ教もしくはユダヤ人キリスト教の資料に遡ると考えられるが、その起源について研究者の見解は様々である。

29 この点は、66節から80節にスムーズに繋がることから確認できる。

30 動詞 πίμπλημι は新約24回の用例中22回がルカ文書に用いられている（ルカ13/使9）。また、この動詞の受動形と πνεύματος ἁγίου が結びつくのはルカ文書においてのみである（ルカ1:15, 41, 67; 使2:4; 4:8, 31; 9:17; 13:9）。さらに言述を表す動詞と λέγων の結合もルカに特徴的な表現である（J. Jeremias, *Die Sprache des Lukasevangeliums. Redaktion und Tradition im Nicht-Markusstoff des dritten Evangeliums* (KEK Sonderband), Göttingen 1980, pp. 35-36, 67-70, 73)。

31 この節は使3:21に近似しており、διὰ στόματος はルカ的な表現である（使1:16; 3:18, 21; 4:25; 15:7）。

32 Jeremias, op. cit., pp. 76-77参照。

6. イエスの誕生（ルカ2:1-21）

6.1. 構成

ヨハネ誕生の記事に続くこのイエス誕生の記事は、イエスの割礼および命名について述べた最後の21節を除くと、内容的に、1. イエス誕生の出来事（1-7節）、2. 羊飼いたちへの天使の告知（8-14節）、3. 羊飼いたちの幼子訪問（15-20節）に区分できる。これら3つの部分は、「（布にくるまれて）飼い葉おけに寝ている乳飲み子（初めての子）」という共通要素によって相互に結び付けられ（7,12,16節）、また、天使の告知について述べる第2段落はその確認について述べる第3段落に対応し、前者は天使の賛美によって（14節）、後者は羊飼いの賛美によって（20節）それぞれ締めくくられている。この箇所は以下のようにさらに細かく区分できる。

1. イエス誕生の出来事（1-7節）
 - 1.1. 住民登録の勅令（1-3節）
 - 1.2. ヨセフとマリアのベツレヘムへの旅と初子の誕生（4-7節）
2. 羊飼いたちへの天使の告知（8-14節）
 - 2.1. 天使の出現（8-9節）
 - 2.2. 天使の告知（10-12節）
 - 2.3. 天使らの賛美（13-14節）
3. 羊飼いたちの幼子訪問（15-20節）
 - 3.1. 羊飼いたちのベツレヘム行き（15-16節）
 - 3.2. 羊飼いの証言と人々の反応（17-19節）
 - 3.3. 羊飼いたちの帰還（20節）
4. 幼子の割礼と命名（21節）³³

33 イエスの割礼と命名について述べた21節は、幼子の割礼と命名がその子の救済的意味の告知へと導く洗礼者ヨハネの物語（1:59以下参照）との関連を考えれば、次の神殿奉獻の記事の導入部と見なすことも可能であり、事実、Fitzmyer, op. cit., pp. 419-420 はじめ多くの研究者がそのように解している。

6.2. 資料と編集

このイエス誕生の記事は、洗礼者ヨハネの物語（1:5-25,57-80）も直前のイエスの誕生予告の記事（1:26-38）も³⁴前提にしていない³⁵。この箇所全体の統一性について言えば、羊飼いのエピソードについて述べた後半の8-20節が統一性をもった元来の物語であり、前半の1-7節は二次的に付加されたものと考えられる。この1-7節のうち、住民登録のエピソードである1-5節は、「御子のベツレヘム誕生」の状況を作り上げるためにルカが伝承を編集的に構成したのであろう³⁶。また、イエスの誕生そのものについて述べたられた6-7節は形式的に1-5節とは区別され、ルカによって編集的に構成された移行句と考えられる³⁷。

8節以降の部分におけるルカの編集箇所を見極めるのは容易ではないが、ルカ

34 ここでマリアは改めて紹介されており（2:5）、ヨセフとマリアは通常の夫婦のように描かれている。また、ヨセフがダビデ家の出身であることが2:4で改めて記述されており（1:27参照）、さらに、イエスの母マリアの聖霊による懐妊（処女懐胎）については特に前提にされておらず、ここに描かれているマリアの態度も天使の誕生告知を前提としていない。一方、Marshall, op. cit., p. 97は、この箇所とルカ1章とは同一のキリスト教集団に由来し、おそらくルカ以前に結びついていたと主張している。

35 H. グレスマンは、元来この物語は、羊飼いたちがその子を養い、育てるように天使から召し出されるという筋のエジプトのオシリス神話に依存したユダヤ教の聖人伝であり、それがイエスの物語に転用されたと主張しているが、推論の域を出ない（反論についてはブルトマン、前掲書、163-165頁を参照）。因みにブルトマン、同書、166頁は、この物語をヘレニズム・キリスト教に帰しているが、旧約的要素が含まれている点を考えれば、パレスチナのユダヤ人キリスト教に由来する可能性も否定できないであろう。一方、Brown, op. cit., p. 411は、この段落全体は、ルカが旧約章句をもとに編集的に構成したと主張しているが、その場合、先行する記事を前提としていない点がうまく説明できない。

36 Fitzmyer, op. cit., pp. 392-393は、人口調査の年代の記載が、テウダによる反乱に関する使5:36の記載と同様、誤っていることから、1-5節をルカによる編集と見なしている（Brown, op. cit., p. 411も同様）。さらにルカ的な要素として以下の点があげられる。例えば、ἐγένετο δέは新約ではルカ文書にのみ見られ（ルカ17/使21）、特に[ἐγένετο δέ+時間設定+結びの文]という表現はルカに特徴的である（ルカ1:8; 2:6; 11:27; 18:35）。また、ἐν ταῖς ἡμέραις ἐκείναιςという表現も新約用例15回中ルカ文書に8回用いられている（ルカ5/使3）。さらに、「～させる」という意の中態形（ἀπογράφειν）は、新約ではパウロ書簡を除くとすべてルカ文書に見られ（ルカ2:1,3,5; 使18:18; 21:24; 22:16）、οἰκουμένηも新約ではルカ文書にのみ見られる（ルカ2:1; 使17:6; 24:5）。

37 前注で触れたように、ἐγένετο δέはルカ好みの表現であり、またδιότιもルカに特徴的な語である（Jeremias, op. cit., pp. 33-34）。

2:51と内容的に響きあう19節³⁸、さらには、後続の段落との繋ぎ目の役割を果たす21節（1:59参照）³⁹はルカの編集句であろう（さらに1:66および8:15参照）。また14節の天使の賛美はルカ19:38と部分的に並行しているが、2:14の方がより完成された形態をとっていると見なされることから、この節とそれを導入する直前の節（13-14節）は19:38をもとに編集的に構成されたものと考えられる。

以上のことから、ルカは、伝承から受け取った羊飼いのエピソード（8-12,15-18,20節）に自ら構成した住民登録のエピソード（1-5節）を付加し、さらに6-7, 13-14, 19, 21節を編集的に付加し、適宜手を加えることにより、この箇所全体を構成したものと考えられる。

7. 神殿奉献（ルカ2:22-40）

7.1. 構成

イエスの神殿奉献について述べられたこの段落は、イエスと両親のエルサレム行きの記事から始まり⁴⁰。幼子の成長について述べる末尾の40節で結ばれる。この段落全体は「律法」（νόμος）という語によって枠付けられており（22,23,24節と39節）⁴¹、さらに、この段落の中心であるシメオンとアンナの祝福に関する記述（25-38節）は、「待ち望む」（προσδέχομαι）という用語によって囲い込まれている（25,38節）。

この箇所全体は以下のように区分できる。

1. 導入部：聖別の献げ物（22-24節）
2. シメオンの祝福（25-35節）

38 接頭辞συνを伴う動詞（συνετήρει）は明らかにルカ的である（Jeremias, op. cit., pp. 86-87参照）。πάντα … τὰ ῥήματα ταῦταという表現は新約ではこの箇所とルカ1:65にのみ出てくる。動詞συμβάλλουσαは新約にはルカ文書にのみ見られる（ルカ2:19; 14:31; 使4:15; 17:18; 18:27; 20:14）。

39 論拠については、Jeremias, op. cit., p. 89やBrown, op. cit., pp. 431-433を参照。

40 前段落からの移行を考慮すれば、本来はベツレヘムからナザレに彼らが帰還したことを示す記述が必要であろう。

41 特に22節及び39節の「律法に従って」（κατὰ τὸν νόμον）という表現に注意。

- 2.1. シメオンの幼子の出会い (25-28節)
- 2.2. シメオンの賛歌 (29-32節)
- 2.3. 両親の驚きとシメオンの祝福 (33-35節)
- 3. アンナの祝福 (36-38節)
- 4. ナザレへの帰還と幼子の成長 (39節)
- 5. 幼子の成長 (40節)

7.2. 資料と編集

この箇所全体は、イエスの誕生の記事 (2:1-21) もヨハネの物語 (1:5-25; 57-80) も前提としておらず⁴²、元来独立した伝承であったと考えられる⁴³。またこの箇所は幾つかの点で旧約聖書のサムエルの物語 (サム上1-2章) と類似していることから、それを背景に構成された可能性も否定できない⁴⁴。末尾の39-40節を除いた部分 (22-38節) は非ルカ的用語が多く認められ、全体として伝承に遡ると考えられるが⁴⁵、シメオンとアンナの物語を導入する22-24節はユダヤ的背景をもつ資料の二次的なヘレニズム的改訂 (ルカ?) と考えられ⁴⁶、またシメオンの歌 (29-32節) もルカによって挿入されたユダヤ人キリスト教に由来する別個の資料に由来すると考えられる⁴⁷。一方で、一家のナザレ帰還について述べる39節 (2:4参照) と、1:80に並行し、後続の段落への移行句としての役割を果たす40節はルカの編集句であろう。おそらくルカは、受け取った伝承 (25-28, 33-38節) に、

42 何より、幼子についてシメオンが語った予言を聞いてマリアとヨセフが驚いている点に注意。これに対し、Marshall, op. cit., p. 115は、驚きは奇跡物語に典型的なモチーフであり、この時の二人の反応は、見知らぬ人が幼子の将来について語ったことに対する驚きであると説明しているが、説得的でない。

43 ブルトマン、前掲書、168頁。一方、Schürmann, op. cit., p. 131は、25-28節 (あるいは22-28節) は元来6-7節と結びついていたと想定している。

44 22-24節の記述はサムエルの奉獻の記述と密接に関わり、またシメオンとアンナはそれぞれサムエルの物語に登場する祭司エリとサムエルの母ハンナに対応している。さらに末尾の幼子の成長の記述もサムエル成長の記述 (2:21, 26) に対応している。

45 Jeremias, op. cit., pp. 90-99を参照。

46 この箇所には律法の規定がいちいち引用され、また母親の清めと幼子の神殿奉獻が混同されている。

47 論拠については、Brown, op. cit., pp. 454-456を参照。

冒頭の22-24節、シメオンの歌（29-32節）および後続の段落との接合部（39-40節）を付加することによって、編集的にこの箇所全体を構成したのであろう。

8. 神殿における少年イエス（ルカ2:41-52）

8.1. 構成

イエスの12歳の時のエピソードについて語るこの段落⁴⁸は、洗礼者ヨハネの記事に直接対応する部分をもたないことから、ここまでの誕生物語（1:5-2:40）とは形式的にも明らかに区別される⁴⁹。その一方で、直前の神殿奉献の記事（2:21-40）と同様、ここでもエルサレムの神殿が舞台となり、イエスと両親がエルサレムに赴いてからナザレに帰るまでの出来事について物語られている⁵⁰。この箇所全体は内容的に以下のように区分できる。

1. イエスの家族のエルサレムへの旅（41-42節）
2. 少年イエスの失踪（43-45節）
3. 神殿での少年イエス（46-47節）
4. 母の叱責とイエスの答え（48-50節）
5. ナザレへの帰還とイエスの成長（51-52節）

42節のイエスの家族のエルサレム行きの記述（「上った」[ἀναβαίνω]）は51節のナザレ帰還の記述（「下った」[καταβαίνω]）に対応しており、双方の記述は3（神

48 英雄や偉人の早熟な知恵を紹介する物語は古代の伝記的作品の中にも数多く見られるが（例えば、ヨセフス、『古代誌』2:9:6やフィロン『モーセの生涯』1:21によるモーセ、ヘロドトス『歴史』1:114fによるキュロス、プルタルコス『アレクサンドロス』5によるアレキサンドロス大王、フィロストラトス『アポロニオスの生涯』1:7によるアポロニオスの紹介等）、この物語はそれを越えて、イエスの誕生物語から宣教活動報告への橋渡しの機能も果たしている。なおこの物語は、新約聖書外典の「トマスによるイエスの幼時物語」19にやや異なった形で伝承されているが、そこではイエスの奇跡行為が強調されている。

49 ルカ1:5-2:40は、神殿における敬虔な高齢の男女が登場する物語で始まり、同様の物語で結ばれているという意味でも、統一性をもっていると見なしうるであろう。

50 直前の神殿奉献の記事と同様、この物語も、両親のエルサレム行きとナザレへの帰還の記述によって枠付けられており、さらに母の痛みのモチーフを共有している（35節と48節）。

殿での少年イエス）を中心とする2～4の部分を枠付けている。さらにこの段落の結語（2:52）は、内容的に神殿奉献の記事の結部（2:40）に対応しており、その意味ではこの段落全体は「イエスの知恵（σοφία）と成長および神の恵み（χάρις）」について述べるこれら二つの要約的報告によって枠付けられていることになり、この段落の枠構造は以下のように図式化できる。

1		2		3		4		5									
要約的報告	エルサレムへの旅		少年イエスの失踪		神殿での少年イエス		母の叱責とイエスの答え		ナザレ帰還		要約的報告						
40		41-42		↑		43-45		46-47		48-50		↑		51		52	
				ἀναβαίνω								καταβαίνω					

8.2. 資料と編集

この少年イエスの物語は、処女懐胎のモチーフを前提とせず（48節）、両親の無理解のモチーフを含んでおり（50節）、イエスの誕生物語とは無関係の、元来独立した伝承に基づいていると考えられる⁵¹。どこまでが元来の伝承に遡るかという点については確定できないが、冒頭から50節までは全体として伝承に遡ると見なすことができるであろう。その一方で、この段落には比較的多くのルカ的用語・表現が含まれている点も無視できない⁵²。特に51節c⁵³および52節は、内容的にそれぞれ2章19節と40節に対応しており、ルカはこれらの箇所を編集的に付加したのであろう。この他、イエスの賢さを強調する47節も前後の文脈を

51 ブルトマン、前掲書、168-169頁やB. van Iersel, *The Finding of Jesus in the Temple: Some Observations on the Original Form of Luke 2:41-51a*, *NT* 4, 1960, pp. 162f等、多くの研究者がそのように考えているが、一方でBovon, op. cit., p. 152は、この段落はルカ福音書の前史の元来の構成要素であったと主張している。

52 Brown, op. cit., pp. 480f; Klein, op. cit., p. 152 A.6; 三好迪『ルカによる福音書－旅空に歩むイエス－』（福音書のイエス・キリスト③）, 日本基督教団出版局, 1996年, 86-87頁を参照。特に三好は、ルカ特有の用語、文体に満ちているこの物語を伝承資料に遡らせるのは困難であると主張している。

53 πάντα τὰ ῥήματα (ταῦτα) は新約文書の中ではルカ文書に特有の表現である（ルカ1:65; 2:19; 2:52; 7:1; 使5:20）。

乱しており⁵⁴、ルカの編集句である可能性が強い⁵⁵。おそらくルカは、特殊資料の中にこの物語を見出し、それをイエスの知恵と成長を示す要約的記述（40節及び51節c-52節）で枠付け、さらに47節を付加することによって編集的に構成し、誕生物語とイエスの宣教活動の記事の間に挿入したのであろう⁵⁶。

結論

以上の考察から、ルカの誕生物語の伝承から編集に至るプロセスについて以下のようにまとめられる。元来、ヨハネの誕生の記事（1:8-23,57-66ab）とイエスの記事（1:28-35,38）は相互に独立して存在していた（第一段階）。次いで、ルカ以前の段階で、両者の誕生記事が結合し、二人の幼子の母親の出会いのエピソード（1:40-45）や羊飼いのエピソード（2:8-12,15-18,20）が付加された（第二段階）。この状態で伝承を受け取ったルカは、別の資料から得た、マリア、ザカリア、シメオンの3つの賛歌（1:46-47,49-55; 1:68-69,71-75; 2:29-32）、住民登録のエピソード（2:1-5）、神殿奉献の記事（2:25-28,33-38）および少年イエスのエピソード（2:41-46,48-50）を付加し、全体を編集的に構成していくことにより（1:5-7,24-25,26-27,36-37,39,48,56,66c-67,70,76-80; 2:6-7,13-14,19,21,22-24,39-40,47,51-52）、一つのまとまりをもった物語をつくりあげていったのであろう（第三段階）。

54 48節の「彼ら」はそのまま読むと、直前に出てくるイエスの受け答えを「聞いていた人々」（47節）を指すことになるが、文脈からは明らかに46節に言及されている両親であると思える。一方で、Klein, op. cit., p. 152は、47節はこの段落に不可欠な要素とし、元来の構成要素と見なしている。

55 動詞 ἐξίστημι はルカ好みの語で、17回の新約用例中11回はルカ文書に含まれる（ルカ3/使8）。さらに πᾶς もルカに特徴的な語彙であり、πάντες οἱ ἀκούοντες という表現は新約ではルカ文書にのみ見られる（ルカ1:66; 2:18,47; 使5:5,11; 9:21; 10:44; 26:29）。

56 Brown, op. cit., p. 455 や O. Glombitza, Der Zwölfjährige Jesus. Lk 2,40-52. Ein Beitrag zue Exegese der lukanischen Vorgeschichte, NT 5, 1962, p. 1 も同意見。この一方で Schürmann, op. cit., p. 139は、ルカはこの段落が誕生物語と既に結合した状態で見出したと主張している。